



百人一首一夕話



百人一首飛登與我丹理卷之三

目錄

素性法師 歌譯

素性良因院 下任了話

文屋康秀 歌譯

康秀の名称文琳と書話

大江千里 歌譯

大江真人博説の志と下りし法

百二十首句題の歌の語

菅家 歌譯

延喜帝寒夜下衣被脱り作

菅公作先祖の語

宇多法皇宮の御所遊説の語

千里文字のりし和歌と下りし法

千里第千古と贈答の歌の語

時平公園経の北方領奪りし法

菅原大江両家の語



菅公始く弓射たし話

菅公類聚國史を撰りたし話

菅公五十賀ふ帝より沙金河御下話

兩皇菅公を寵しけり話

菅公左近の宣旨下り話

太宰府より詠けり詩歌の話

安樂寺の墓所を定む話

時平公薨せり話

菅公の靈河北野に祭り話

西の糸のあやこり話

阿闍梨仁俊歌の話

飛梅の話

菅公の所母詠歌の話

唐の裴文籍菅公の詩を賞す話

菅公時平と共に知主を輔佐し話

時平菅公を洗せり話

菅公亭子院を教とす話

菅公薨去の話

都の雷鳴の災あり話

菅公が本位を復しけり話

天満宮の廣号にありけり話

待賢所の衣箱ぬすり話

西七条銅細工の作

太宰府祭礼の話

大江匡房の作文神慮よけり話

太宰府より鬼取の話

菅公櫻の詠歌の話

聖廟の話

三條右大臣 歌譚

貞信公 歌譚

相者皇子大臣相す話

忠平東御好む話

宗像神忠平の夢にんり話

中納言兼輔 歌譚

堤中納言の話

源宗于朝臣 歌譚

太宰府の神社連歌の話

安樂寺景致の話

重衡の詠歌の話

忠平南殿の鬼に逢たり話

花山院築地に瞿麦を植り話

凡河内躬恒 歌譚

月狐弓矢しりしつゝ

貫之躬恒勝劣の話

壬生忠岑 歌譚

忠岑貫之の弟子の話

坂上是則 歌譚

朝閑朝朗の話

春道列樹 歌譚

志賀山越の話

紀友則 歌譚

藤原興風 歌譚

濱成式天書の話

大堰川行幸の時の話
御厨子女の話

忠岑禁忌の詞羽躬恒の難せり話

是則鞠の達せり話



遍照君子

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

素性といふは

物の名を利し
 清和天皇の御
 右近衛の將監
 又中務院に任
 持律の任せし
 又石上良因院に
 十一説俗名を信
 時ついでして僧
 正遍昭のよこ

素性法師の

今もじつじつと
 長月ありあけの
 まりくはるあ

古今集恋四歌ありすは歌のころは彼人か
 今のまもめんといひをせしをさるるまはく九月初
 長き夜よまてまて其人はますく在明の月と
 在明の月廿日やうはのた

夜ふけは遠く出る風やうらさか夜の時よん
 在明の月廿日やうはのた

素性法師の話

長峰宗貞出家して遍昭の多岐行ありははのま
 了避志ころれりま在俗の時まは在俗の
 及くこれ物の上なるらるる遍昭のまはす利と遍昭の
 名は素性といひしは明のより法ありまはるる
 大和國石上の良因院の任持なり昌泰元年十月廿一日
 法皇の御遊覧の時素性はあは良因院に任せし
 り遊道のほのめしはるれを素性といふ馬の

道の程くまわし並り松はけり甚よみらそせなすアかてまあ性
笠城ぬき鞭とあけし所らの案内とやうし並り其時其の作
今日供奉の者も皆俗人しりて素性の呼名假名俗人
↑として假使せし良因院の文字よりて良因の御存しよとせ
まうて其日暮よりれとも多勢の石久ぬの山荘は一夜やせし
まう其夜は白皇の作は良禪河ハ和歌の名士がねと先和歌とよて
旅の心けがらあらうとく素性も秋をさしほす白雲のりま
性のまゝ素性と思はは皇女の御沙汰ありましりて所よも
て世をひく作しりて

秋よまじりて山あひの流のありはらまらやとん
あしり

先祖の御代
す作者部類元
慶元年維殿助
任すりう古今集
の参考採り
文屋の姓ハ姓氏録
ハ天武天皇の御手
二品長の親王の
がしり

文屋康秀

あしり秋の草はあ

あしりやうもあしり

あしり

古今集秋下よ切くともあしりこれさなりて秋の秋
あしりては是貞のみとハ先考文白王第二の白王
秋のうぬ山風うぬも秋の草やあしり
あしりて其山風と



はら
五の膳と
りふり
しん
作供
水
白糸
織け
たひの
はる
夏五右大臣

宮
古
お



寛
平
元
年
の
夏
五
右
大臣
の
御
祭
に
あ
が
ら
し
ま
し
た
と
い
ふ
事
は
さ
か
し
ま
し
た
事
は
さ
か
し
ま
し
た

かゝるものなりしこと此歌古今の序に野老の草木のくさ草
家万葉集よややは林の草木のくさ草文は林のくさ草
まづ秋の志をねとりて初めは秋のくさ草す風さきり
けいこうのくさ草をさきりて初めは秋のくさ草す風さきり
人海をさきりて折檻すは初めは秋のくさ草す風さきり
むしやふくさきりて初めは秋のくさ草す風さきり
和名鈔に山下に風はあすなり和名ありしに山の下に風と
しるや山さきりて初めは秋のくさ草す風さきり

ぐんやのやまひで
文屋康秀の誌

此人のくさ草の先祖もつしりしはまきすをせむるまの付もぬんがれ
まきのくさ草の序にふんやのやまひつしりしはまきのくさ草の序に

おきすいもあき人のくさ草の序にふんやのやまひつしりしはまきのくさ草の序に
秋はくさ草の序にふんやのやまひつしりしはまきのくさ草の序に
秋の姿はくさ草の序にふんやのやまひつしりしはまきのくさ草の序に
さかひつしりしはまきのくさ草の序にふんやのやまひつしりしはまきのくさ草の序に
けいこうのくさ草の序にふんやのやまひつしりしはまきのくさ草の序に
畧せし琳の康秀の字よりまきのくさ草の序にふんやのやまひつしりしはまきのくさ草の序に
備行は三権とつしりしはまきのくさ草の序に

帝の寵と仰れ候に任参候はすは昔原相公とて時の儒者
作られしは是は若しの家ハ禁裏の南に在り昔原院と申さる
是美の第三の弟子通真字ハ三ツヤセハ切き時より祖又清公又是
善が侍來の学業汲けく儒道深きひれりしは向聰明の生
質なりし文徳天皇の齊衡二年道生所生ハ一の春又の是善ハ
多田忠臣ハ一人ハ弟子ハ真の才乃に深識とて世人とてひれり
ひくらし春が月も咲く梅もかりり候はすは向の儒者ハ
つらひにまを人やらんかたにやうし候はすは向の儒者ハ
月輝如晴雪 梅花似照星 可憐金鏡轉
庭上玉房馨

又其頃都良香より學者は道真良香にほひて遊學し候は
りし真觀十二年の春の比良香の家より人より射りしは

はしひれりしは道真ハ儒家の子なりと常々言ふとて
圖とて十学文のやみかくらり候はすは向の儒者ハ
知はれりしは試は所り射させんやうに候はすは向の儒者ハ
やうに揚を立出ら矢をさし候はすは向の儒者ハ
基く射りしがやうに候はすは向の儒者ハ
はしひれりしは試は所り射させんやうに候はすは向の儒者ハ
奇美のおいしやうに候はすは向の儒者ハ
えん服せしは四年より文章生は奉りて下野村標の候は
ら向より四年の四月廿八日正月母伴氏方より候はすは向の儒者ハ
よく務とては道真赤んぼの夜よませはひ物拾遺集候は
えん月のおいしやうに候はすは向の儒者ハ
月の桂をわたりしは向の故より候はすは向の儒者ハ

送春不用動舟車

右使韶先知我意

唯別殘鶯與落花
今宵旅宿在詩家

これら其中の詩より一とほは大明言公任朗詠集に採り入らるる
又次の詩より一今昔をけなかりて二時の中三十首他言く集せり
昔も今も同じやけなかりのしとあひらるる今昔の九言の詩
五十二句は大明言公任朗詠集に採り入らるる今昔の九言の詩
但せしむるたるの詠集に道真の五言の詩と執り入れり
時平の官なりし大明言公任朗詠集に採り入らるる今昔の九言の詩
二月宇多天皇御位太子敦仁親王に譲りたまひ朱雀院に入らせり
真子院とせしめりし時平は作らざりしに寛平は作らざりし
中平は作らざりしに敦仁親王は醍醐天皇も延喜帝とも作らざりし
泰二年時平は左大臣に任し道真を右大臣に任せり時平は左大臣

濫行の人がかねも昭宣公の嫡子とて代り大伴の家柄がうりれを當今等

一のけし定めりし時平の妹君は當今延喜帝の后にがせたまふ又時平の

外祖は系高右に明帝の御中より源光之入りしは道

真おほひめりしは我身なりし儒家より起りて右大臣に任せりれは

予も表はせしめりし右大臣と縁にけしひりれは上皇も今帝も時平の

かたしく幼主は輔佐にもしよの御中より再と時平にたまふ御

中へたまふは時平の道真公が詠せしき起りて昌泰二年

二月三日延喜帝上皇の朱雀院への御中より帝は白く御

侍りては密に御作せりし御中より當時は左大臣時平は右大臣道真相

て御中より御執りたまひては御中より御中より御中より御中より

いつき一人とあらし御中より御中より御中より御中より御中より

御中より御中より御中より御中より御中より御中より御中より

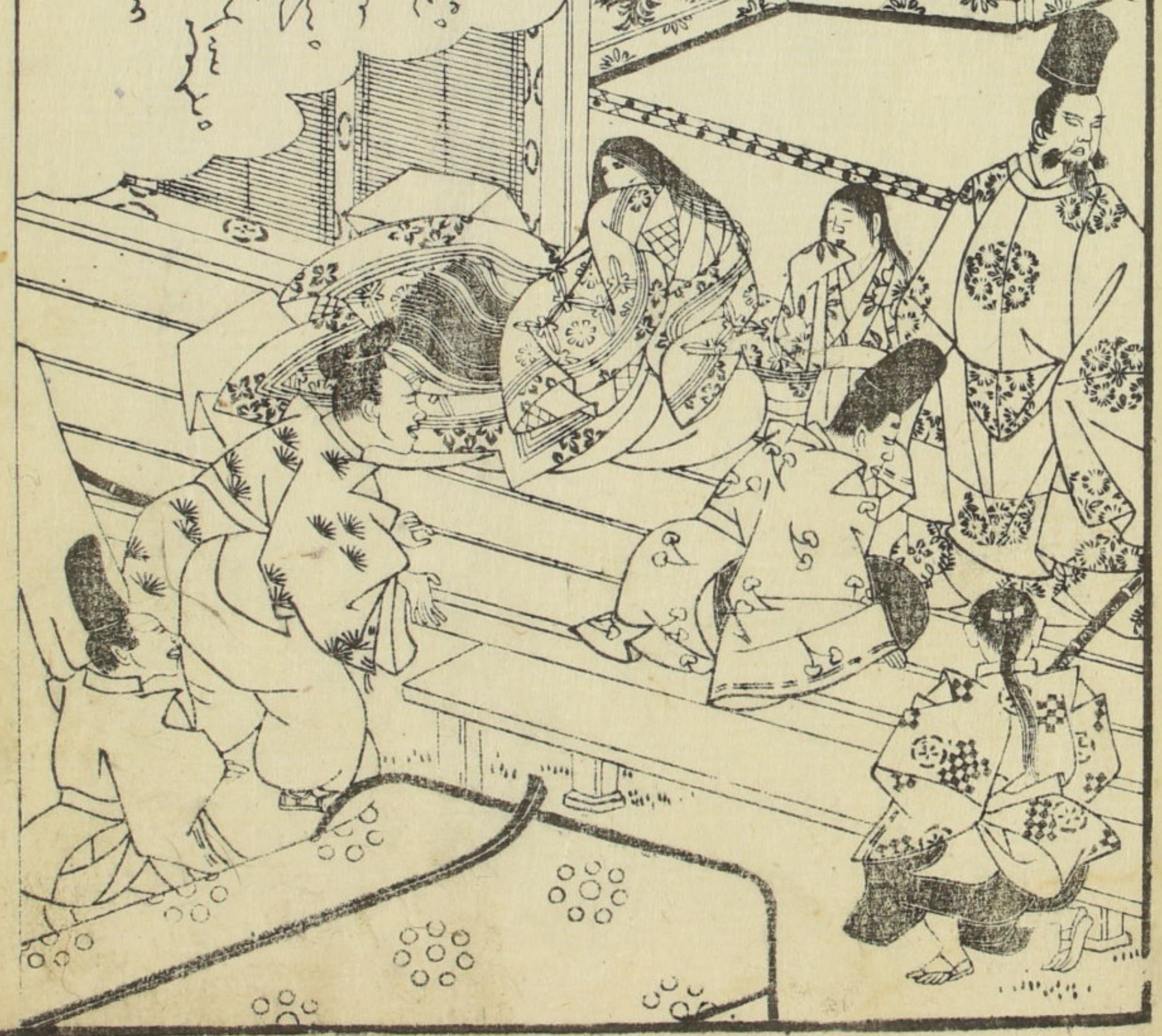
御中より御中より御中より御中より御中より御中より御中より

御中より御中より御中より御中より御中より御中より御中より

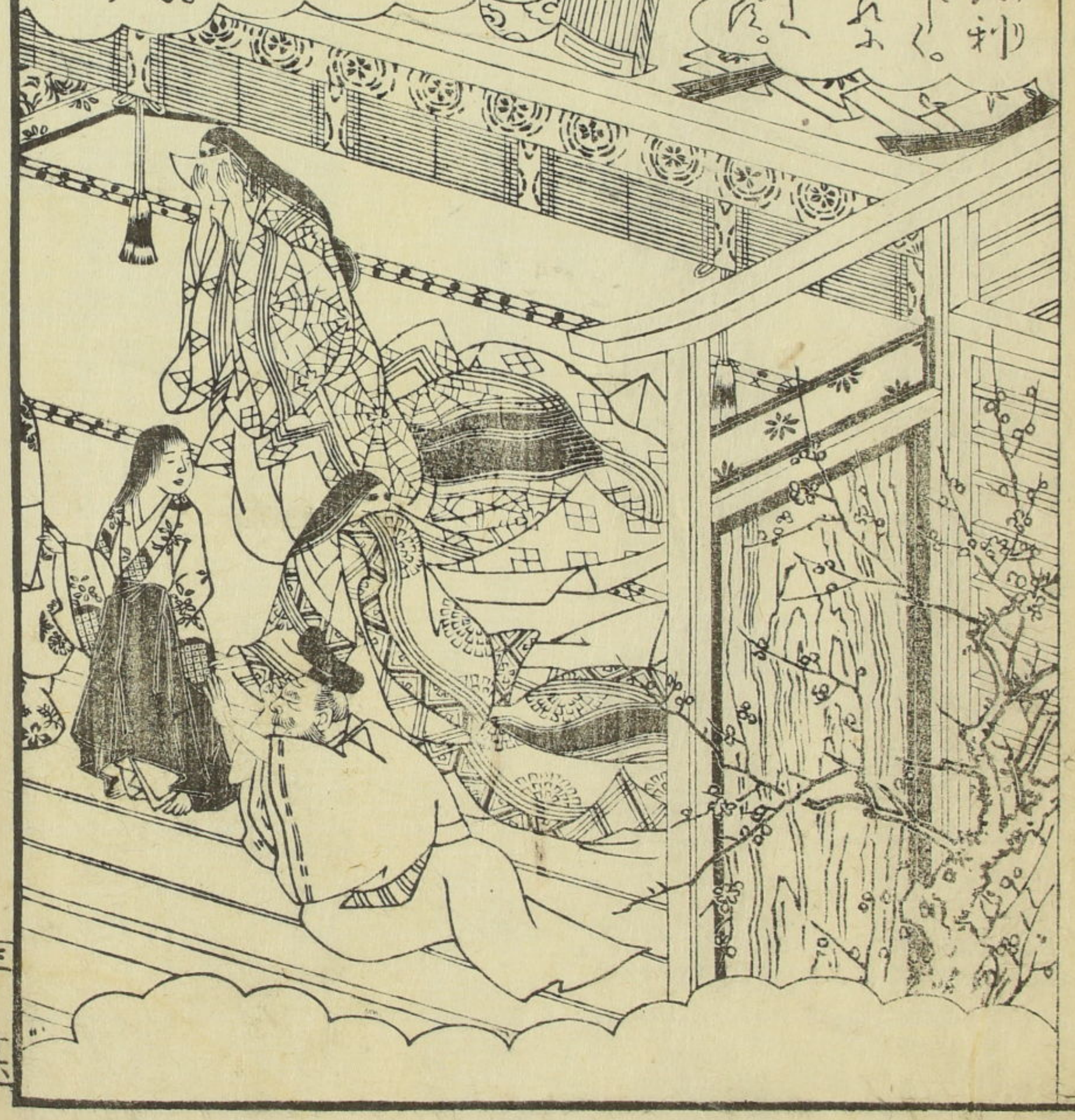
御中より御中より御中より御中より御中より御中より御中より

御中より御中より御中より御中より御中より御中より御中より

さふとかがり
一宮にけり
都の藝うり
是も一白一章
さそわもそげ
や。孔子曰る
伯夷叔齊ハ書
無念をた
そりみわらう。後
家後草と見て
あはれとあま
之吾衛作が
涙り。そま
物に此恵ふ
てわまといけ



説者其古利
初も其
賢人君子
周の徳
茶は福あり
は身と世
賢を賢
其悪を
憎める
けり
うらや
に
離れと作
物



大職冠九代の孫（みさき）として昭宣公の一男として山后の兄をかくりし

二十歳にして其身の才心の徳も在りて真公（まこう）なるよりなりやん

重代の執政なりしに聖人の教習する賢徳を以て執政の任に

任じたりと雨皇の御前より道真公（みちまこと）を召し出されしに

まかされしと任せたりしを道真公（みちまこと）はとりこみけりし

真公（まこう）とよきしにこれにていかに心なほけりしに

御前より召し出されしに道真公（みちまこと）はとりこみ

まかされしと任せたりしを道真公（みちまこと）はとりこみ

まかされしと任せたりしを道真公（みちまこと）はとりこみ

まかされしと任せたりしを道真公（みちまこと）はとりこみ

まかされしと任せたりしを道真公（みちまこと）はとりこみ

今時平公のりき例を述べてらんを雨皇の御せり

の公の御後よりいかに心なほけりしに

今時平公のりき例を述べてらんを雨皇の御せり

の公の御後よりいかに心なほけりしに

今時平公のりき例を述べてらんを雨皇の御せり

の公の御後よりいかに心なほけりしに

今時平公のりき例を述べてらんを雨皇の御せり

の公の御後よりいかに心なほけりしに

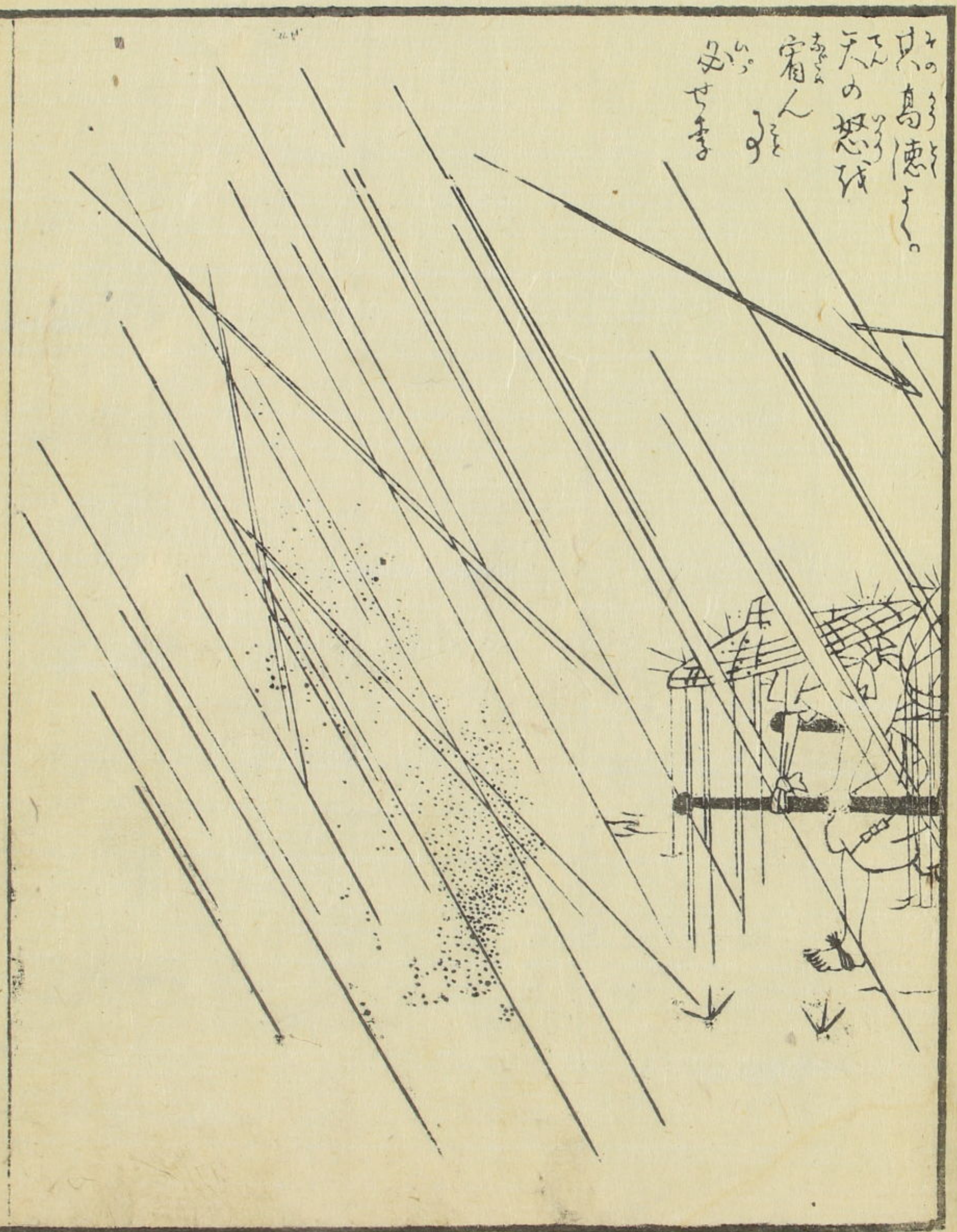
今時平公のりき例を述べてらんを雨皇の御せり

の公の御後よりいかに心なほけりしに

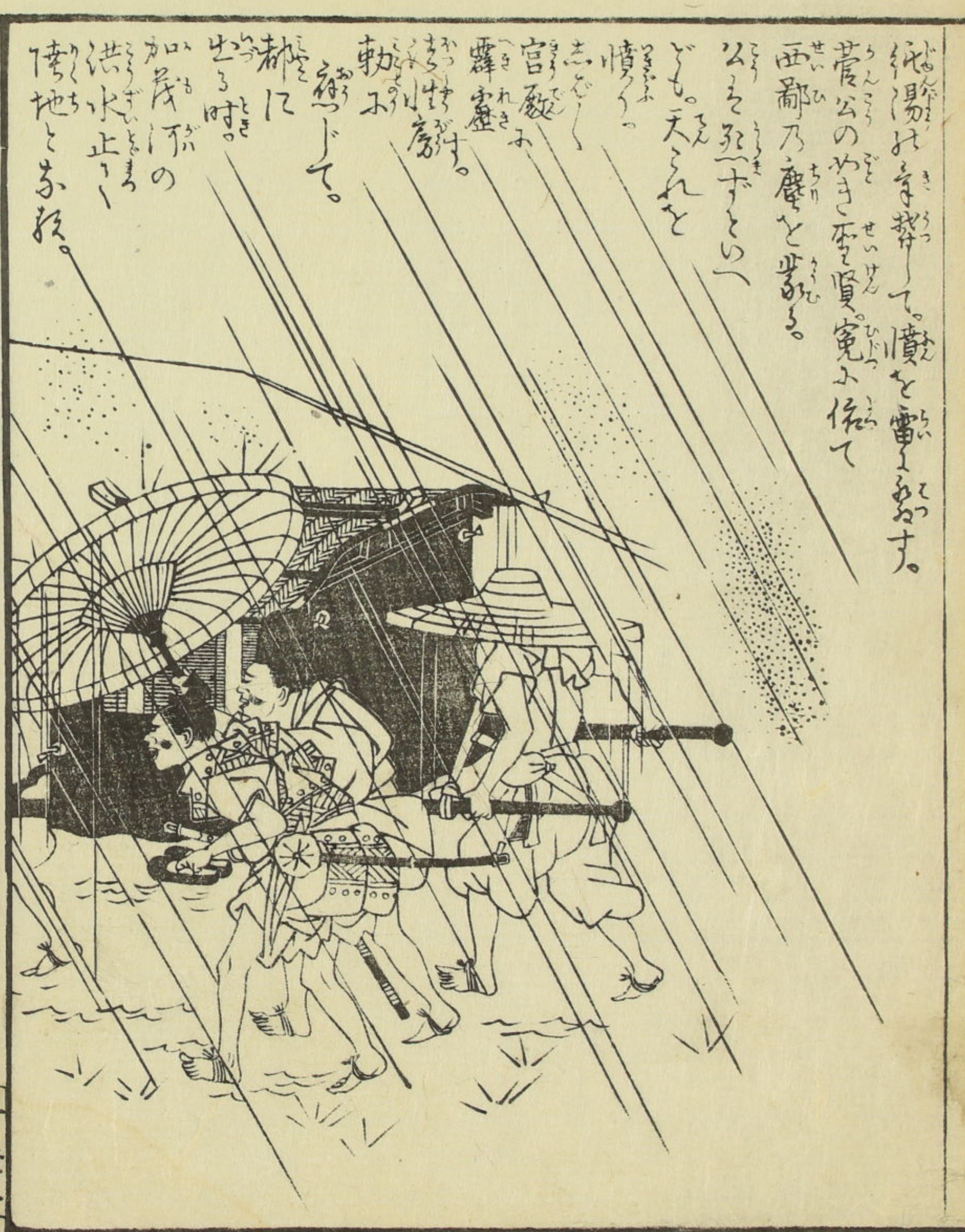
今時平公のりき例を述べてらんを雨皇の御せり

けくすらんよざらう叶らんやむけめく宵晦日十夜の夢見よ
 匠土成ふませなまひ上西門より豊楽院真言院と打と清涼殿と
 のせなまひのくかきしやせし作せせりれし昔根の自藏人
 昔殿上の庚申の夜の夢遊よつづけられせし恨あつて昔酒
 ちうりれはけの世の中らきれ根めくきけめく大なるの
 本ののよまやしむしむの山のよまやむ改むめく還けよ
 らせれまう道真公ハ勅宣きりて男女の所は二十三人おしせし中
 男子四人ハ同く四方へ流されしむしむめくおりまけぬ都
 しらしめらしてつひのむしむ月達二人ハ真まあせむあせむ
 して紅梅殿をせせせたまひ梅沢の流らんむしむあせむあせむ
 ころあせむ
 ころはむしむむせむ梅のむしむあせむあせむあせむあせむ
 ろ

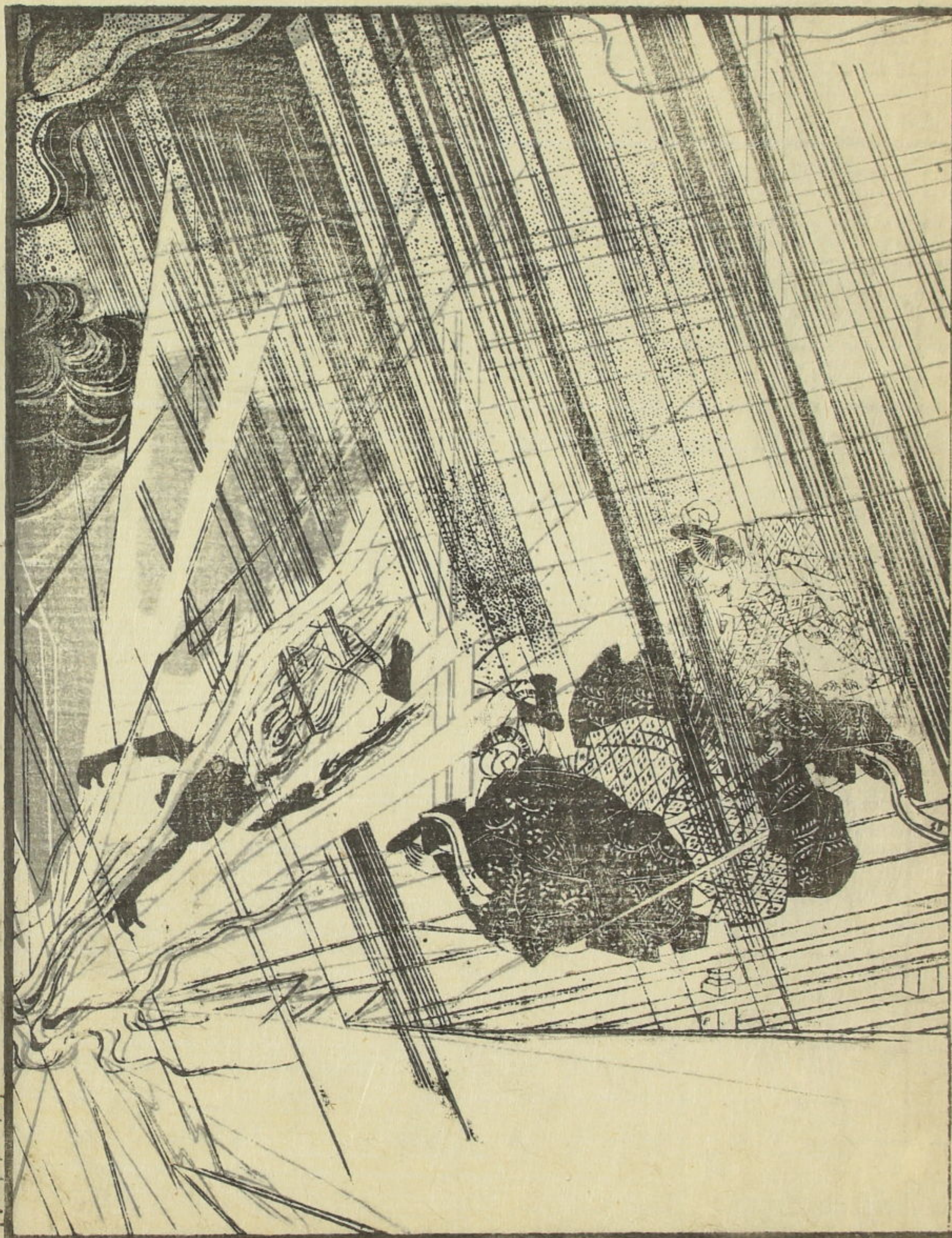
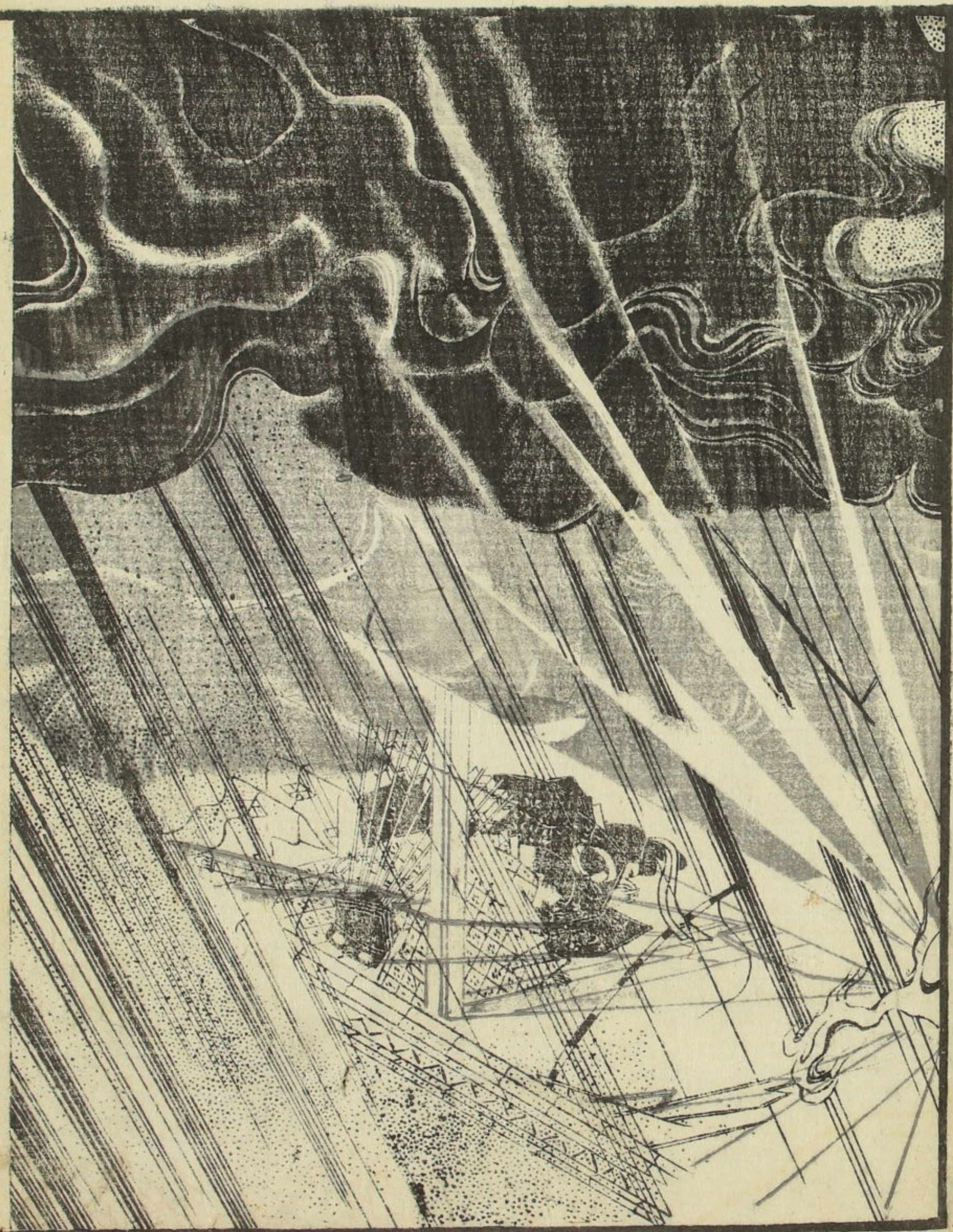
ころはむしむむせむ梅のむしむあせむあせむあせむあせむ
 けのゆあまはくくく梅のむしむあせむあせむあせむあせむ
 本く菰葉へおもむせせたまひあせむあせむあせむあせむ
 おけめく北の方へ野せたまひ
 君の子むしむの宿をゆしむころはむしむあせむあせむあせむ
 けが橋磨の明石の浦は海にせたまひあせむあせむあせむあせむ
 おしむしむあせむあせむあせむあせむあせむあせむあせむ
 驛長莫驚時變改 一榮一落是春秋
 懐遠述ませむ詩よ
 離家三四月 落暎百千行 萬事皆如夢
 時 仰 彼 蒼



只の鳥徳よ。
 天の怒成
 宿人
 必
 さま



此湯は手替つて。賤を重くおす。
 菅公のゆきを賢寛小依て
 西鄙乃塵と世ある。
 公を死すとい
 ども。天を
 憤
 志
 官殿
 霹靂
 勅
 都に
 出る時
 加茂河の
 洪水止
 傍地と
 なる。



中へく北野よりいへば

わのいひやせむるあたひに

とふいふれと其日やあき

治部通俊の子せそ寺の阿闍梨

かふ或女房もねはは俊に俊

やすすむのひく北野より

られも神もな

とふりし時の女房れがの

あつてに俊より

おせりれに俊の女は俊

おせりれに俊の女は俊

ひせれしひろくは種々の

中へく北野よりいへば

まがしはく

の妻すむすめと

ふん

流し

母は孝養報恩

託宣

ゆくお

姉呼

せ其故

ひき

は

は

は

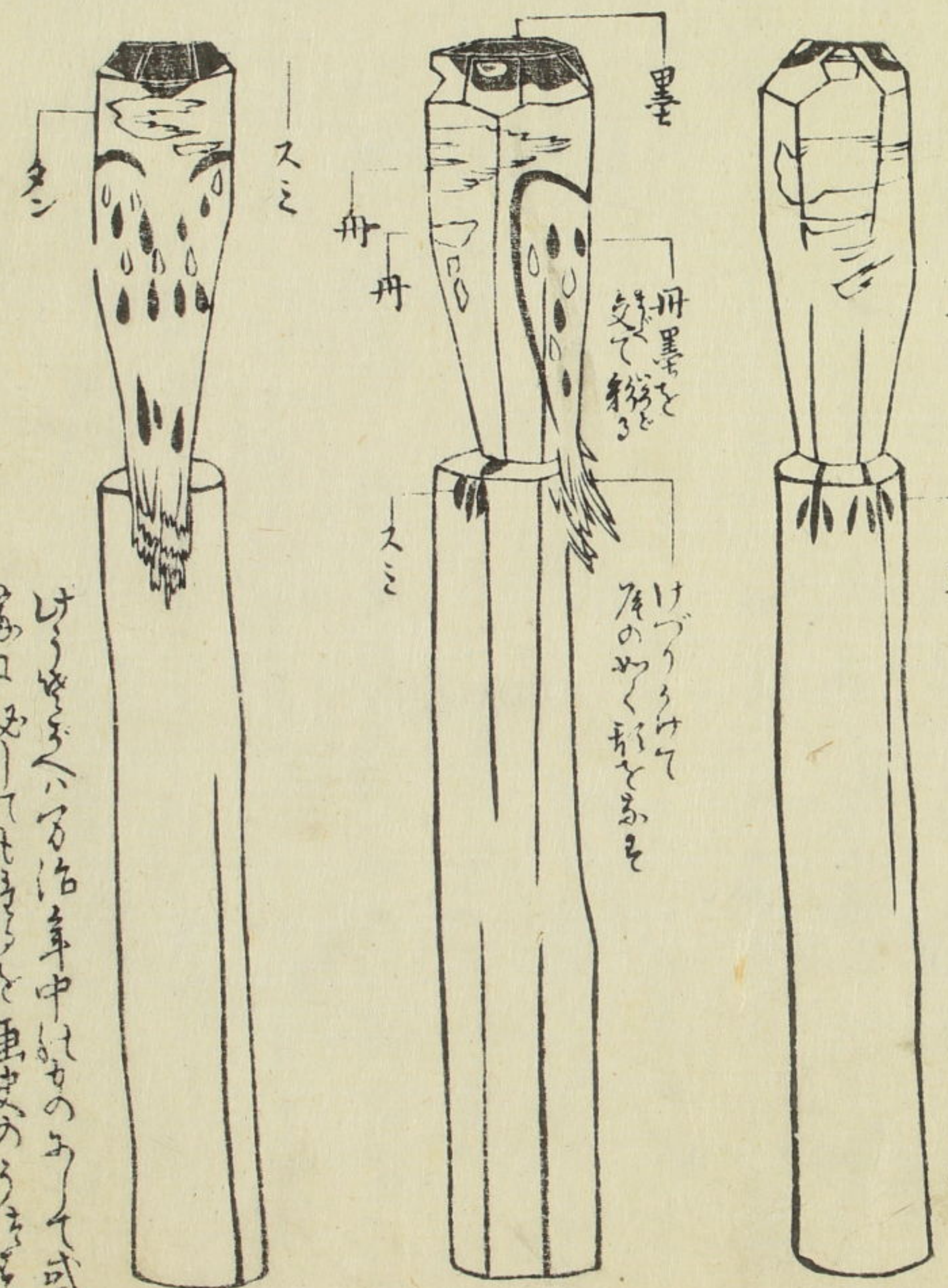
は

一いつとて妹もまはくせせしむるもなほしめしむる
たつとて又母の孝養をせりまきしけりかやけしむるは
荏柄縁起北野縁起等の古き巻軸のせり又俗説は昔公の所記
かゝるいひは梅のひさしにひさしにひさしにひさしにひさしに
曰く昔公のたれも風をなす所歎とすは梅のひは紅梅は
しめしむるも梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
の梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは

梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
又榻鴨曉華は曰く昌泰四年正月菅正相と太宰府帥は九月
配流せしむる梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは

夢の告りては梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは

昔公の所記安樂寺は梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
名融院の所記二年此所の社の中へ一字一廻廊を築き梅のひは
常行堂宝塔院は建り皆是勅命とせしむる梅のひは梅のひは
帝勅の堂院多し梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは梅のひは
逐くつて繁栄の堂區を築き二月廿五日佛忌日なり梅のひは



けしきをへる治年中は女のあしや
 家工秘してしきしを魚史のうはま
 をはちり古形をたれりし

字の字如へけりしりるる

櫛のたれ本をりて遠

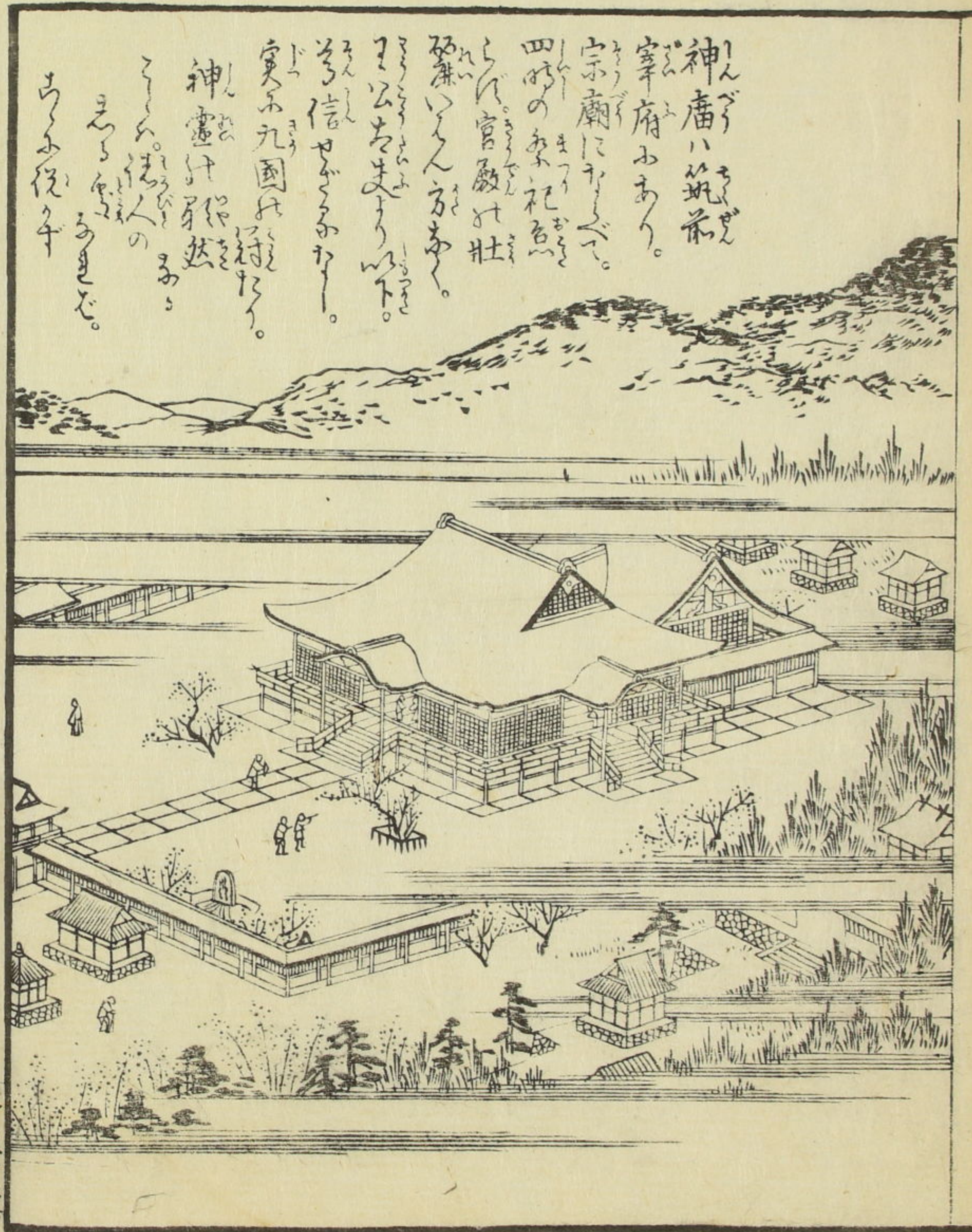
和漢ニ才國會曰響正字未詳扶大於鸞頭真
 黑西類至頸深紅背短而黑背胸及翻灰青
 帶微赤羽尾黑其声山滑而短鳴時隨声而
 脚互拳如彈琴搖手故俚俗稱守曾彈琴
 或以形畫畫豔曰守曾姬雄呼暗唯呼而
 大和本草ニ雄ヲテリウツト云紅ニ雌ヲ云ク
 ト云アカラス其声如啼ユニ名ツク云

響正御祭車ハ毎歲正月七日夜
 西の刻迄系法ノ老ヲ用セ本ホて御
 琴ヲ鳴ト御ノしハ袖工カクノ奏カフ人ト
 會テ合テ双方より御奏スルニ其
 社司ト云合ニ此響出ルニ是ハ
 音ハありと云カク御ハありと云
 兼師者ニ遊館ノ式ヲ有テイトハ

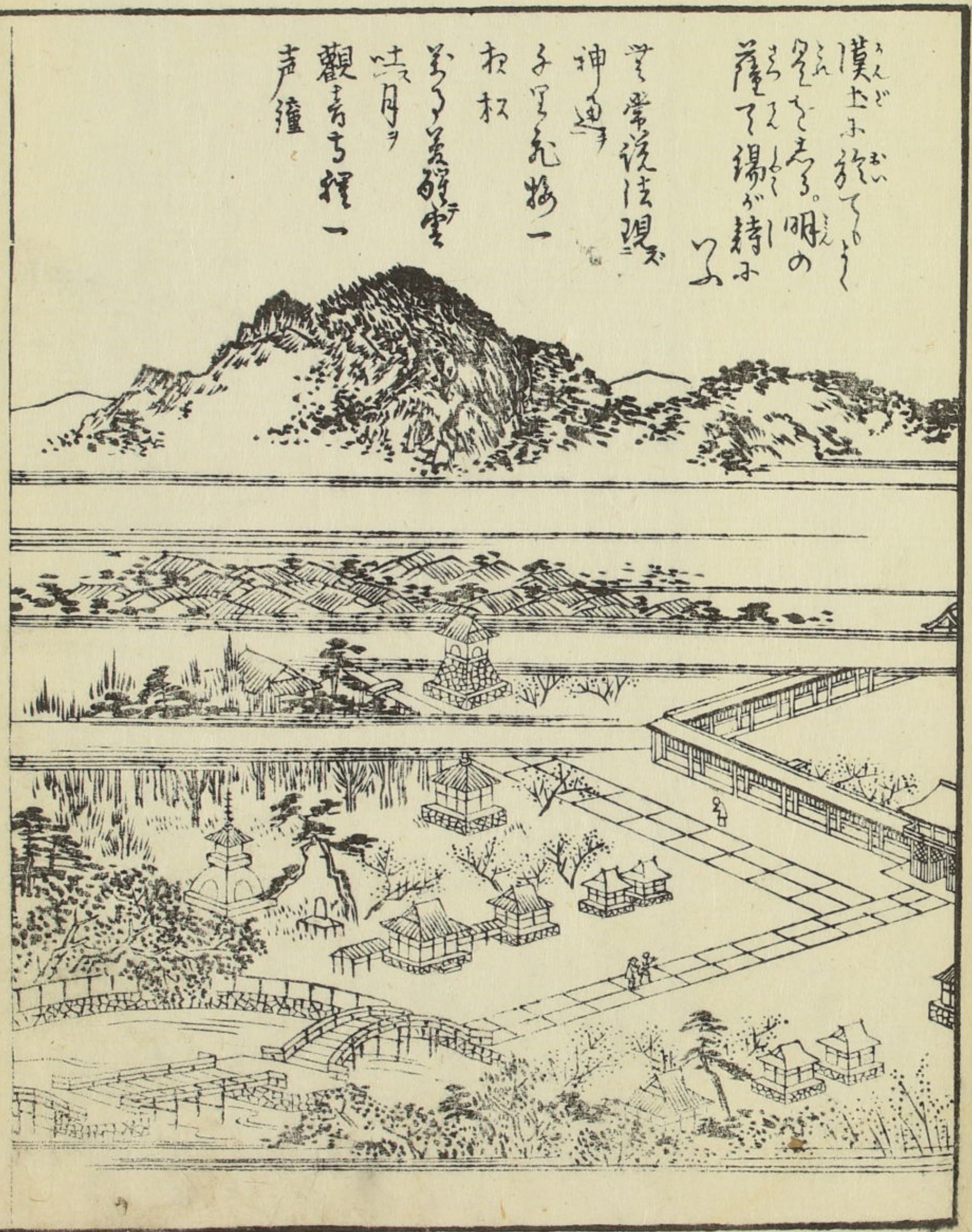


わらわら 祝髪しく信貞し号し其嫡子を信昇とすおぼろ大を始小
も始が家の家いれく其子孫相統く今よりく社務職より近頃
延宝四年より司檢校坊快鎮文学よりりり人のたよりもなれ
しして神殿の靴のほくくは赤社の文庫をゆくなく化れり衆
力けりくしてやめぬやそ四方の國より經文の外の外もろくの書も
多くくはゆめなれり赤社に南はむり社前は赤池はくく及指二
所より其間より半島は直指はり赤池のめく二百八間元宮地東西
五十三間南北百七十間は都よりくくちあはしよませたまひし梅
一夜は太宰府よりいぬとせよとい傳はり其梅をこれ梅と称す
其本ハ種と植付く今も赤前よりみ梅これと
かたけはれり人けりしよやのけりしすれぬ梅の三枝と
新古今集神祇部より此歌は建久二年の春の頃けりしよりり

もの安樂寺の梅を折てけりし夜の夢みんりり人となまじり
よれり又菅公梅もこの中をやれりり希ね梅集の家より
まき所より時前我のさく乃花はゆいつけり
菅原右大臣
さく乃花めりしすれぬりのけりし風はくくはつるやよ
かく生前よりくくをいれり本がれりりも居の外なる道徳の
左右に並木のさくは梅く梅の馬場と号す赤二年の秋平家
宗盛より一門のくくく安徳天皇と供奉し都を居り筑紫より
下り八月十七日太宰府より着せけは八回より十八日平家の人大臣
殿とけり安樂寺よりすりりすりり秋より連飲してやれ
とせりれる中よりか三位中納重衡つ
位がれりしよやのめさハ津もむりしひあらん



神廟ハ筑前
 宰府ニあり。
 宗廟ニありて。
 四時ノ祭礼有
 此ノ官殿壯
 麗ニ人ガあ
 り公若夫以下。
 信ヤカクあり。
 實ハ九國ハ
 神靈ハ然
 々ハ人ノ
 志ハあり。
 今ハ役年

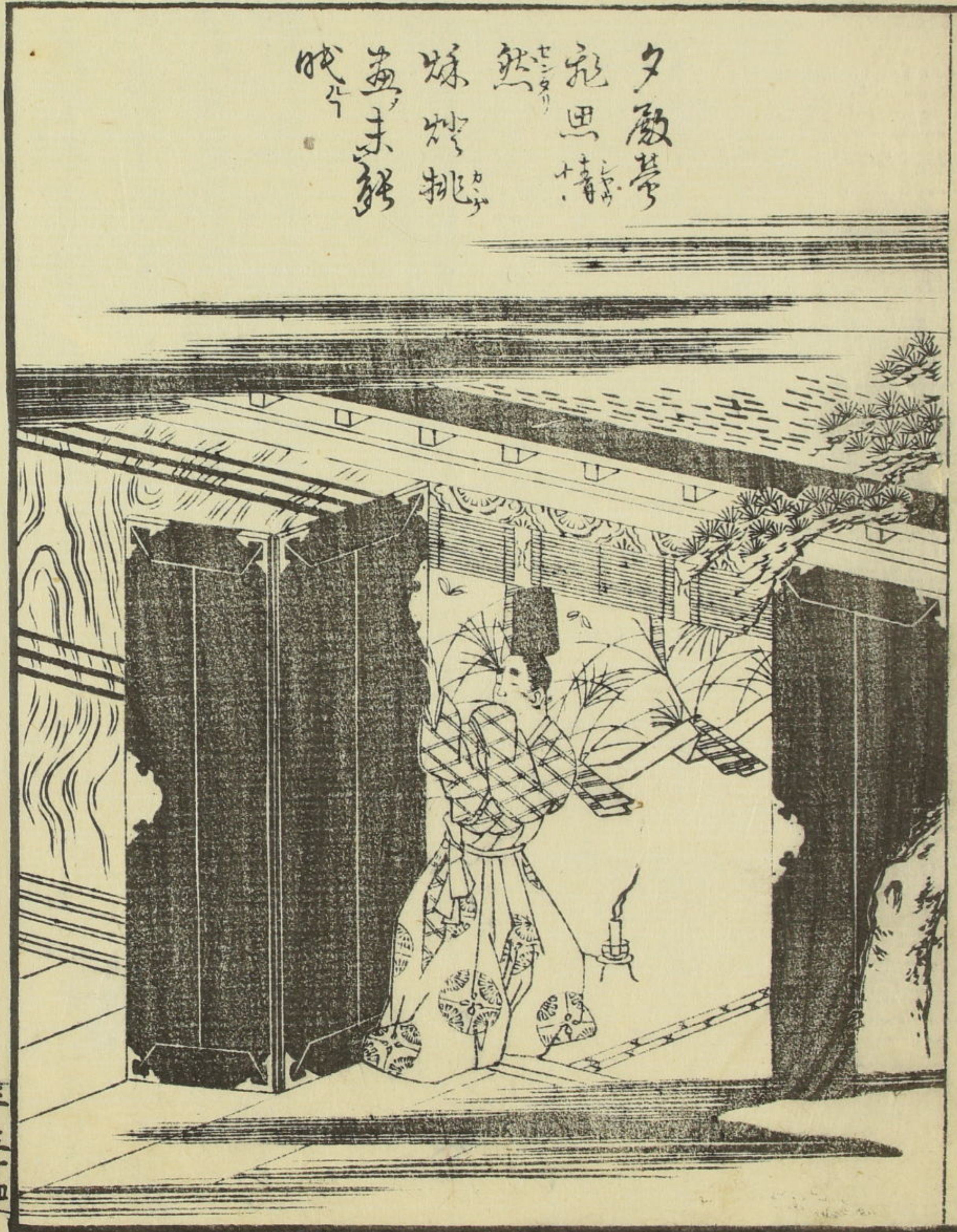


漢土ハ筑前
 名ヲ有シ明ノ
 産ヲ揚ガ持ハ
 其常法理
 神通
 子里丸梅一
 ねね
 美月
 観音寺一
 声鐘

かくもはるかにひらきひろくはるかにあはれしくしる神をみだれし
 ところ持するまはれと盛衰記の皇后宮亮經正の作しりしる
 玉葉集も重衡の作しりしを盛衰記の説はりやりのかきしりて
 此佛社の地ハ竈山東よりひえ天判山西よりひい篠川前より石
 踏川北よりかきしり西よりかきしり思川よりかきしり四王院大城の山北よりかきしり
 ちり芦城の駅南よりかきしり右よりかきしり都府橋の路太宰府の
 官舎の地なり其西よりかきしり山川村里のりき林のあまきり
 足とくろまのりかきしりあまきりもくろまは佳境に鎮西府
 今にたして谷よりかきしり山よりかきしり佛社のわりかきしり故今もかきしり
 衆おはれてりしとをかりしりかきしり霊地におのりしりかきしり
 たりし神徳のりしりかきしりなかりしり山城の北野の佛
 社のりしり諸書はけりしりかきしりかきしりかきしりかきしりかきしり

かりて奉るも同じ昔神の所靈なり其所はあまきりしりかきしり
 作さるるへきしりしり又上りしり聖廟の称号のりしりかきしり孔子の廟
 へきを昔廟とほせしり聖廟とてしりかきしり年中行事故実考よりしり
 書は昔家と北野は祠は子孫世に其祠は祠なりしり昔昔神
 かりしり聖廟の号と勅詩にりしり其は天下よりしり昔昔神
 像は奈は祝奠の遺風なりしりしり

夕殿夢
龍思情
然
殊妙挑
蘇未強
成



定方公勸修寺家
の元祖良門の孫内
大臣高直公の二男
がう母は宮内大輔
弘益の女は長長二
年四月大納言
了右大臣に任ぜ
られ

三條右大臣

名はたけあき山八
こひねりていふ
くもつね

採集志云とんかのりにはけりしむり
うのハ名一おりのハ字ハ助字とんた
あつしををる負てわさな其山
まのりよふそんやまうけ人う方

あまのついでに逢坂山八重江の名所をめぐり五味子と
 実のついでに八重江の昔のまはりの名所をめぐり
 万葉のついでに八重江の昔のまはりの名所をめぐり
 万葉のついでに八重江の昔のまはりの名所をめぐり

三條右大臣の話

定方公醍醐天皇の朝右大臣に中納言山内隆房のむすめは
 朝忠朝威朝親の一人のむすめ又一人のむすめは先帝の
 女房に承平二年八月十日に薨せしむ一説に五十七歳
 ころ其家三條より三條の右大臣と稱せり

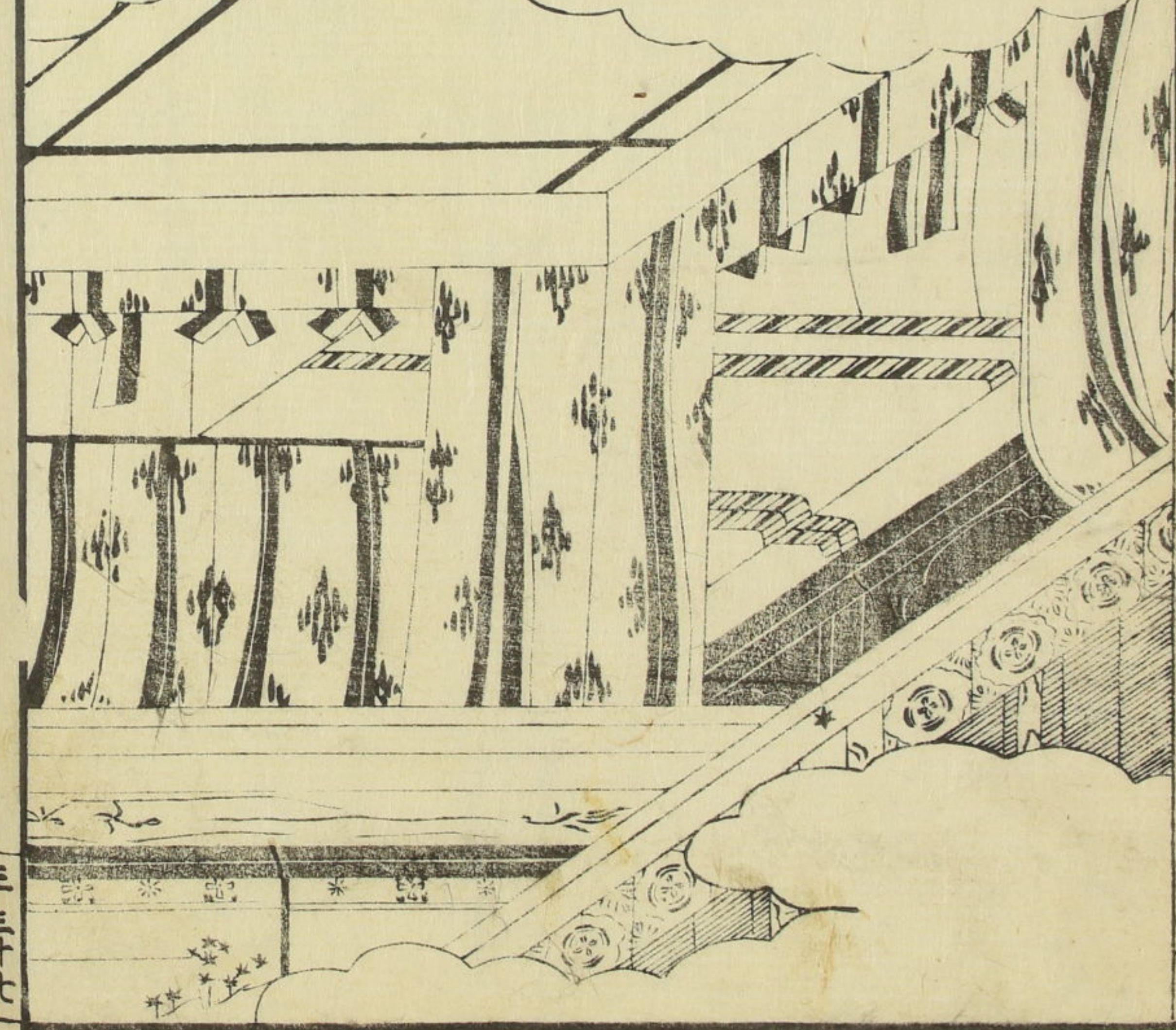
忠平公基経公の
 四男母は輝正尹又
 康親王の弟むすめ
 たり寛平年中正
 五位下と叙せられ
 左大臣と轉せり
 同八年攝政承平
 二年准三宮小一
 條太政大臣といひ
 又花山院と稱す

貞信公

とくやうのり
 たり
 みゆきまはる

拾遺集雜部は尊子院大堰河は師幸の行幸
 もあまのついでに八重江の昔のまはりの名所をめぐり
 奏せんむとくやうのり尊子院は寛平法皇の行幸
 大堰河は山城の名所とて師幸の行幸

拾芥抄曰貞信公
 徳之延長八年六月
 二十一日、霹靂
 清涼殿之時侍臣
 生色、心中歸依
 三寶、殊無所懼、大
 納言清貫、右中將
 齊世、尋常不、
 佛法、西人已
 尚其、以、
 謂之、
 久位、みづか、
 之法、依、
 説、ど、誓、あ、



もが、は、志、る
 室に、ある、室、中、
 頼、お、さ、さ、る、神、
 色、白、く、更、お、
 髪、は、短、か、ま、を、
 懼、し、こ、進、ま、お、
 英雄の資。
 尋常の
 通ける名
 および、
 あ、



第一、妻せしむる世よ少一條の本政大存りきかたは性ちよ
禁じて正位所賜せし追く信濃公封せし眞信公と謚と賜
りて忠平公寛仁にて善事流る故上下も又惜まぬ人な
らば在世の時兄の時平公仲平公とも高官たり故時の人
三平ともやけり又延喜帝相人を禁中へめされ太子并は左右の
大臣と相せさせたりし時彼相人文献彦太子をえなきて時容
貞のりきまてし時平公とてハ才智とてしよりい音通
相とてハ才能とてしよりいひは是も福を令けし相小
のりしと備せよ忠平の末坐おひやとよの相人ともふ指して
才智容貞兼備すべく朝家とすけさくけし言人のけ人
かんらひの寛平はまぜしは忠平と稱す
はひあひの所むすの傾子とす忠平よめりをせりまうぬ忠平

公ハ菅原の道真公とて少中よりれをほく一たまのぬも常
音信孤絶一ぬらす兄時平公よりての嫌疑ハ少中よりりし
忠平公のりし時宣旨候へけ陣の度らむらそ夜中ハ南殿の所
帳の一紙通置たりし即何者もあらず時平公の所置と捉へ
け怪しむる候へば候へば候へば候へば候へば候へば候へば
刀は刃のやがれぬ鬼がらりててててててててててててて
臆せしとてはははけの勢とてててててててててててててて
者かきうけりてははははははははははははははははははは
とてててててててててててててててててててててててて
年さけり又忠平公事候すもなほしはははははははははははは
つ親王の家とて是れ本の家なり其其本とてはははははははは
對し西の毒戸のんははははははははははははははははははは

はよはけにすけぬる九條坊門鳥丸の尊より土師門の内裏へ案内せ
らる時此門前を通りて交りては序車の簾とわたり前駆の人と
下馬させしむる故人のあやうく其子細とるひひもせしむ
貞信公の手付けに植らるる名木りしむりて礼をせしむるとの
一又皇事の四面の築土のうへに瞿麦といひて植らるるよし
花よりすく錦はあはれしむるやまはらばは花の伝はるる
又忠平公の家の邊は宗像の明神の社ありし忠平公は其の
車より下り社の前に行きしむる夜宗像の汗まきしむる
まひりし君は我より位よりて指さすなるよし社の前に行きしむ
たきし毎は夜とやすしなすものりしむるよし社前に行きしむ
ね帝を奉りしむる宗像の社と云はすありし忠平所より五人
りし太郎は左大臣とて家形のよしと云はす小野又殿より治郎ハ

右大臣よりし補のよしと云はす九條殿より治郎は五位下河保四郎
の氏の大臣よりしむるよしと云はす五位よりしむるよし世は桃園と稱し和歌よ
たすし家集と海人より古良より五郎より又左大臣の母のよしと云はす
小一條殿よりヤヤより五位より兼は五位を賜せられたり又女子
一と云はす坊の侍息所よりしむるよし常より人の大なるのよしと云はす
たすし爲よりしむる小一條の南勘解由よりしむるよしをせしむるよし
たすし其一町のよしと云はす

勸修寺家の元祖
 良門の孫右中將利
 基の子と寛平九年
 七月昇殿せしむ
 同十年四月讃岐掾
 小任せしれ延喜二年
 四月七日後五位下地
 長五年四月十二日授
 三位中納言同八年
 十二月右衛門督と
 兼承平二年二月
 大日五十七歳に
 卒す

中納言兼輔

新古今集恋一
 山城の名所と
 山城の名所と
 新古今集恋一
 山城の名所と

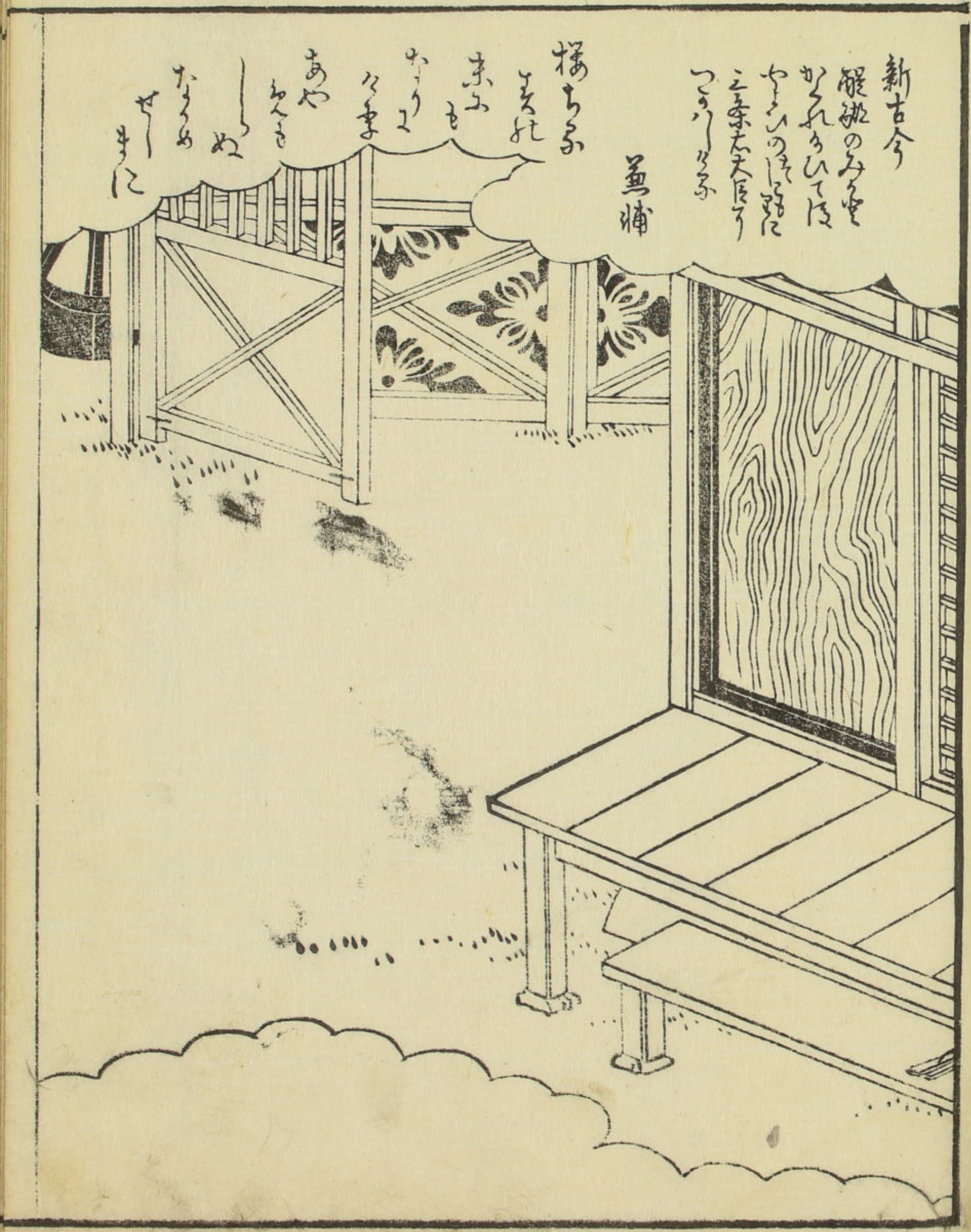
新古今集恋一
 山城の名所と
 山城の名所と
 新古今集恋一
 山城の名所と

てははと
 新古今集恋一
 山城の名所と
 山城の名所と
 新古今集恋一
 山城の名所と

中納言兼輔の話

兼輔は加茂河の堤の下に家居せしむりて
 兼輔は加茂河の堤の下に家居せしむりて
 兼輔は加茂河の堤の下に家居せしむりて

又曰集は兼輔の
 又曰集は兼輔の
 又曰集は兼輔の



新古今
 麗遊のみを
 かたむいては
 やまのほろに
 二条大天長
 つらうらふ

魚浦

梅ちあ
 玉れ
 未ふ
 かり
 々々
 あや
 ぬ
 たあめ
 まに



法撰
 方五社内竹小魚浦の
 ことひてかきし
 あまをうてかきし
 内竹はうらふ

後人

たや
 玉の身
 玉もは
 玉の身
 あうに
 々々
 ねた
 あま
 玉の
 枝
 こま
 あま

植置うゑ置き一ひと二葉ふたはのわらわらわががきき君きみららののななままららああららしし
 又貫之つらゆきの採和歌集しんせんさうしを採とせしせ原はらせりりとと勅ちく遣しんとと兼備かねびのの付つけりりししのの依集よじの序しよををくくしし兼輔かねすけ子こ四人よににんをを推おし正清しやうせい正守しやうしゆ
 正慶しやうせい正等しやうとうなり

又また光孝ひかりたか天皇てんかうの所しよ
 子こ二品にひん式部しきぶ是忠親しちか
 王わうなりなり一説いっせつは仁明にめい
 天皇てんかうの所しよは本宗ほんそう
 親王しんわうの所しよははなり
 寛平かんへい六年ろくにん五月ごがつ廿にじふ二に日にちは
 四位よゐ叙しよせられ承うけたまはり
 平へい二年にねん十月じふがつ下した右みぎ
 京大夫きやうだふ四位よゐ叙しよせられ
 天皇てんかう二年にねんは

源宗于朝臣

やりしをみえし林はやしと
 まじりし人目ひとめは草くさも
 うねぬとけりし

古今集ここんしふ冬部ふゆべははなり
 山中やまなかの里のさとははなり
 まじりしをみえし林と
 まじりし人目は草も
 うねぬとけりし

くはらふまのつよのほの林たけさふかしくさひさあふりては
のまれくはえいふ人目ひとめもくえきもあましくしうりては
くさひさうりてはあの上うへの句くしてはしるこ万葉集まんやふしふ離りの
まはしる人目ひとめのさうりてはあふりてはさうりては

源宗于朝臣の話

延喜廿年閏六月光孝天皇第一の皇子一品式部しきぶ是忠親王これただのちか出家
なしく南院なんえんのみしりては南院なんえんの北きた壬生の西にしく
は親王ちかの家いへし宗于むねよりゆたはは親王ちかの所ところより大和物やまともの竹たけ字多
の院えんの花はなたりりうけり南院なんえんの宮みや達たつふれあはしうて歌うた
か〜〜右京うぎやうの〜宗于むねよりのよみか〜
よ〜〜ふもゆすさうりてはあふりてはあふりては

とあり又曰またいひ一物ひとものは南院なんえんのいまま〜り右京うぎやうの〜
むすあしうは兵衛ひやうゑの〜の君きみりや〜みえり曹そう
あ〜あり〜はう〜
〜あま〜は夏なつのねれ〜と〜
〜あま〜は本康親王ほんかうのちかの所ところより〜
あま〜は是忠親王これただのちかの所ところより〜

凡河内一姓の祖
天津彦根命
根凡河内の國は
の子孫は昔此世
の人世の河内守
の如く代り河内の
國を治めたる
此躬恒も其河内の
の子孫なり
ふれも躬恒良
高よりそのまも
ひひ或ハ甚利
人の心し
其父祖と云ふ
をい

凡河内躬恒

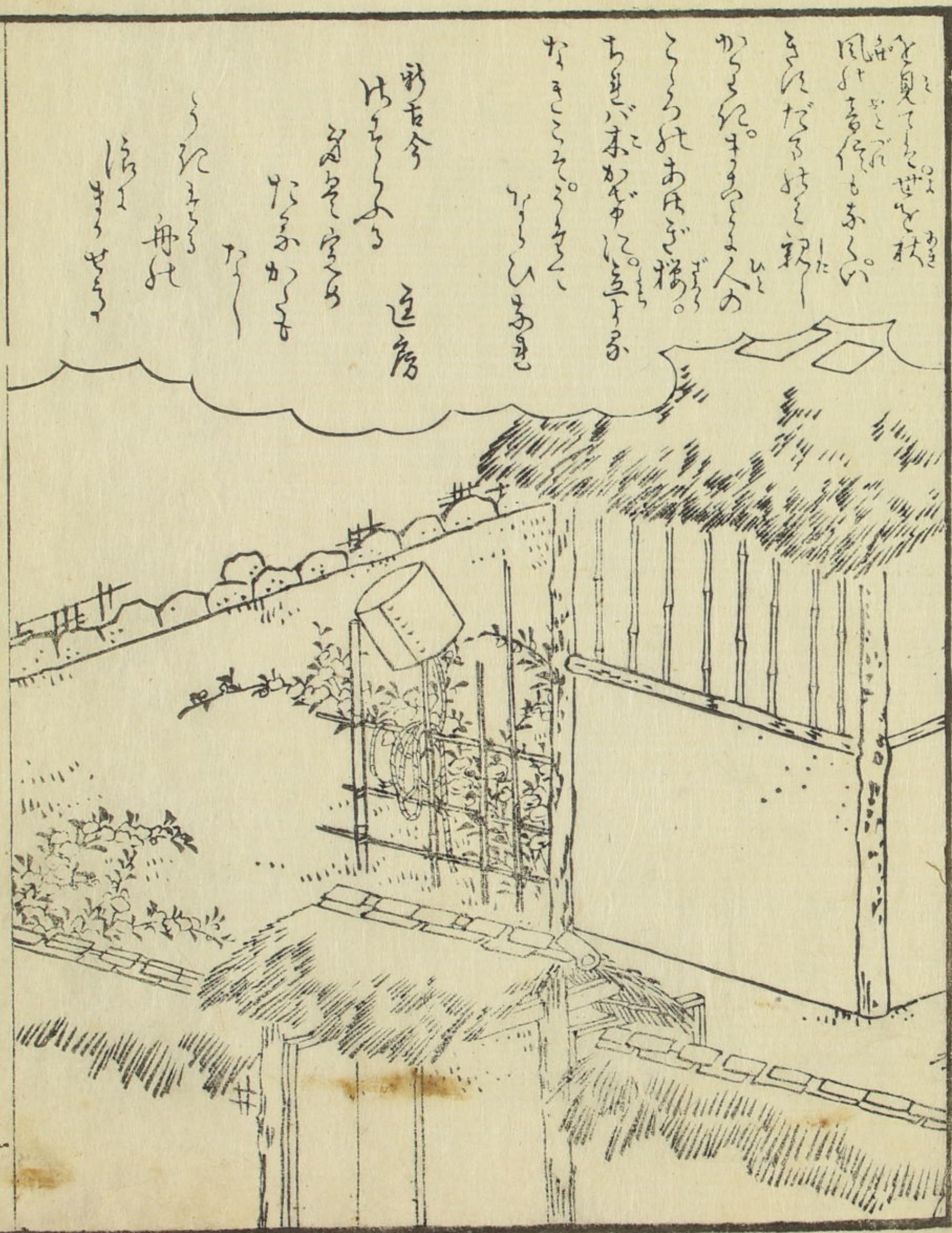
古今集秋下
白菊の花
ゆののむい
あはれ

古今集秋下 白菊の花は
ゆののむい
あはれ
えらり

らうら初霜ハ秋の末より
おれと
のぼり
推量

凡河内躬恒の話

躬恒ハ凡河内小身の
故寛平年中甲斐少目
波打目法
今集勅撰の時も
帝ら凡河内躬恒階下
かきいれ
て凡河内
帝甚貴



見ても世を杖
 風は喜作もあふ
 さげたる好を親
 かゝれたまふまふ人の
 くらればあはれ様
 ちとば本わや中に
 なまこころうさ
 けしひまふま

新古今 近房
 けしひまふま
 なまこころうさ
 けしひまふま
 舟は
 けしひまふま



一
 いさぎつ交情あつたふさ
 いらの人のれりるみり人も
 まゝくりにあふ人た
 ほひあつたふさ
 思ふもはれりる
 天ふたあ
 玉はれりる
 かのハハ
 なまこころ
 氷は入る
 ちもはれりる
 まもはれりる
 マア人
 けのせりる
 中家れりる

躬恒の家は様ゆゆけく春舟をたすうらゝんぬみ入るるは
其たあふはなみくもるる

よやの花ええええあけの八ちうねなるりりり

是ハ世の人の所信をいひてはくもゆるやうに古今集

も入り又は採集しゆひの飲めらふと法ぬのまのそ人の

任くくの信りきうておの頃兼輔の佐の栗田の家ええして

引ぶてんつひを老れれれのさうかうりりりり

はるそあつたの信りくもるるへつ信恒のまのこり恒恒の四

歌に散位九河内躬恒にらるるのすの日題九ひあつて續

人かゝるかゝり小外の人ハハヒとて一首はるれと躬恒ハ鶴

はるるるさるるの外の二題は二首とてく歌すれれ其日の眉目

たしりりいはの世よ三奈の大相國檢事連の別當とて二條の仲

二人躬恒貫之の飲の勝者と満せと三條の相國ハ躬恒とほあ

らよ三奈の仲ハ貫之と養らあつてはよ同族はくくかみ

りあつてはくくはるるりり三奈の仲すく白河院へ奏すて

市批判がよもれりは院の作ハ朕とて勝者を定む言け

りの信影がよもれりは院の信せれ類まきりりり

ははは信影を城すくたはらちちなるりり躬恒とあれ

とやまはたははははははははははははははははははははは

貫之のあつたははははははははははははははははははははは

信影がよもれりは院の信せれ類まきりりり

はははははははははははははははははははははははははははは

はははははははははははははははははははははははははははは

はははははははははははははははははははははははははははは

はははははははははははははははははははははははははははは

はははははははははははははははははははははははははははは

よしく躬恒の官成侍書所の預け有り又侍厨子所候士と云せり
此侍厨子所よりハ天子の侍膳と設け可し不し厨にてもやと云す
字もく侍書所よりあつて清の細言の枕の更子よりつとやかの
いさげやと云く侍厨子より同く世俗の飯
於き水汲むと女と云く侍厨子所より同くつとやかの
らりませしこれ水仕りて侍厨子の充てり

壬生の姓ハ天足彦
國押人の命のぬし
山宗神皇の御
かみいづね世主
生保よと云ハ
手ハのえと云
字ナリと云ハ
トのりナリ古き
ものこハ壬生と云
ふと云ハ源順の
和名鈔ハ壬生と
たつと云ハ布衣
と云ハ云

壬生忠峯

あつたのつとや
おとよのつとや
りのつとや

古今集恋三より侍厨子の意ハ存明の目ハ
夜の明よと云へる侍厨子の意ハ存明の目ハ
侍厨子の意ハ存明の目ハ侍厨子の意ハ存明の目ハ
侍厨子の意ハ存明の目ハ侍厨子の意ハ存明の目ハ

なれりし外傳りてよめし詠秋のめ方よりむき出
しきより外傳りてよめし詠秋のめ方よりむき出
宣秋門の故し番長は撰集も在兵のつひのよきけり是ハ
左右合せし十六人は忠岑又延喜年中禁中の歌合よりあけの
つぎめりしし詠集もよき詠集なり其詠とてはよき詠集なり
詠集身之撰て遂に昇殿とせられ詠書所候せし貫吉の躬
恒等しよき今集と撰せしめし忠岑嘗て和歌の十體と
よめし詠集と先師土州の詠集とよき詠集なり詠集の
よきなりしや土州詠集とよき詠集なり詠集のよきなりし
てはよき詠集なり今集の中の秀歌は詠集なり詠集のよき
よきなりし時定家宗隆兩人なりし詠集のよきなりし詠集
よき詠集と第一のよき詠集なりし忠岑長岑とたもれて

康保二年まてなりし詠集は九十八年まてなりし詠集なり
詠集の撰集の人なりし詠集なり詠集のよきなりし詠集
時宣吉よりし春の歌なりし詠集なりし詠集のよきなりし
よき詠集と躬恒の詠集なりし詠集なりし詠集のよきなりし
位よりせられたる詠集の詠集とせられたる詠集のよきなりし
中よき詠集のよきなりし詠集なりし詠集

かく殿上人がひは藤原董之帯刀の長在系相如櫻井清など
 のみかく蹴鞠せしめたまひ一時是則も人ねの内かくつりりりり
 二百ふなやて連足は蹴くひり墮ふれりしは帝このみ
 せたまひ内藏の絹をたまひし西ふおの裏書日之
 これハ是則も書して所書ふの衆りり時のこは是則ハ
 子望城ハさして物よほされり人もあふりりハは採集の採
 者くくりらとハハ又是則の答るるりりしあなまハ

小任
 任せられ又出雲
 二十年
 博士
 名宿
 從五位下
 雅樂頭親
 一男文章

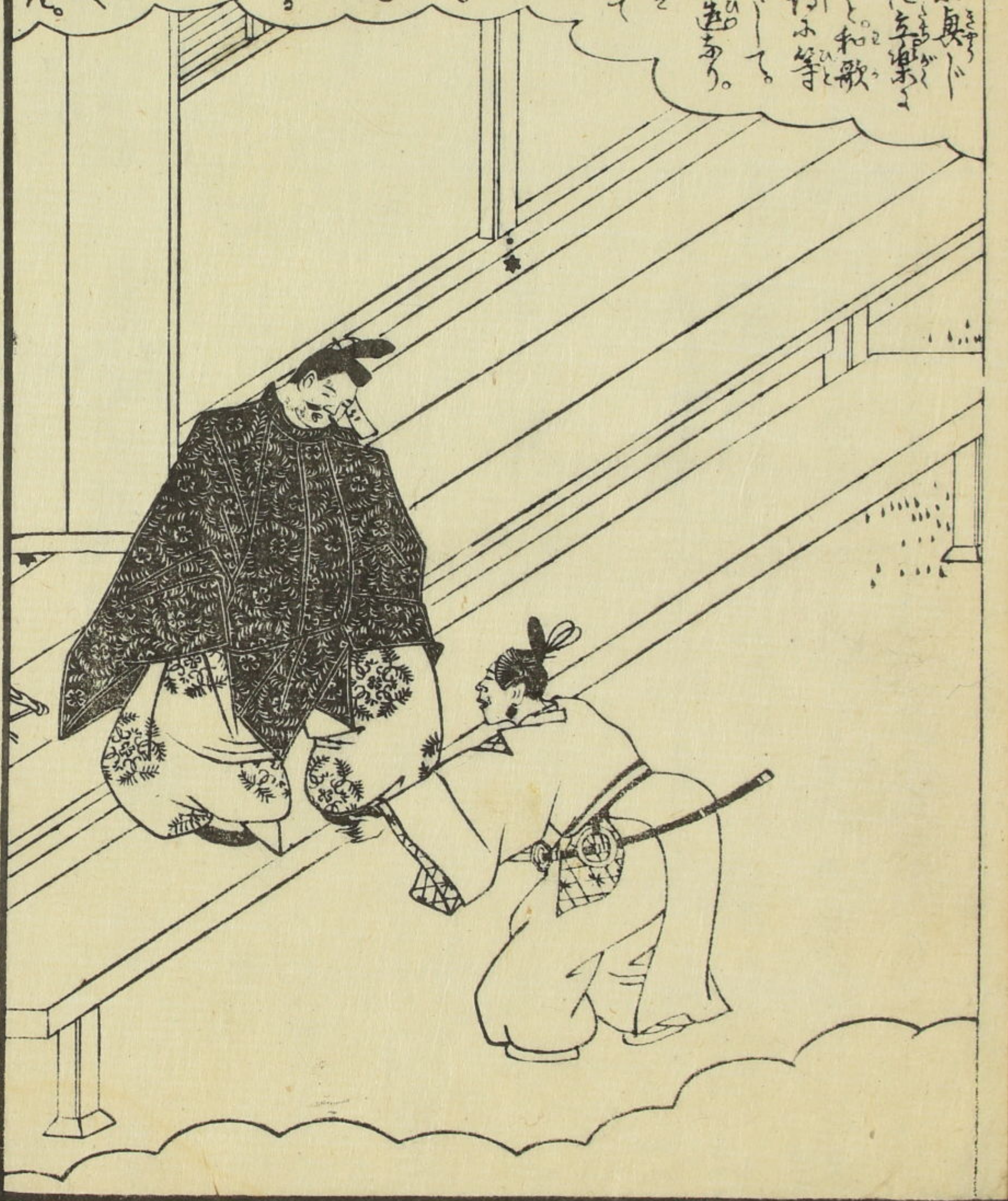
春道列樹

やうへい風のそけ

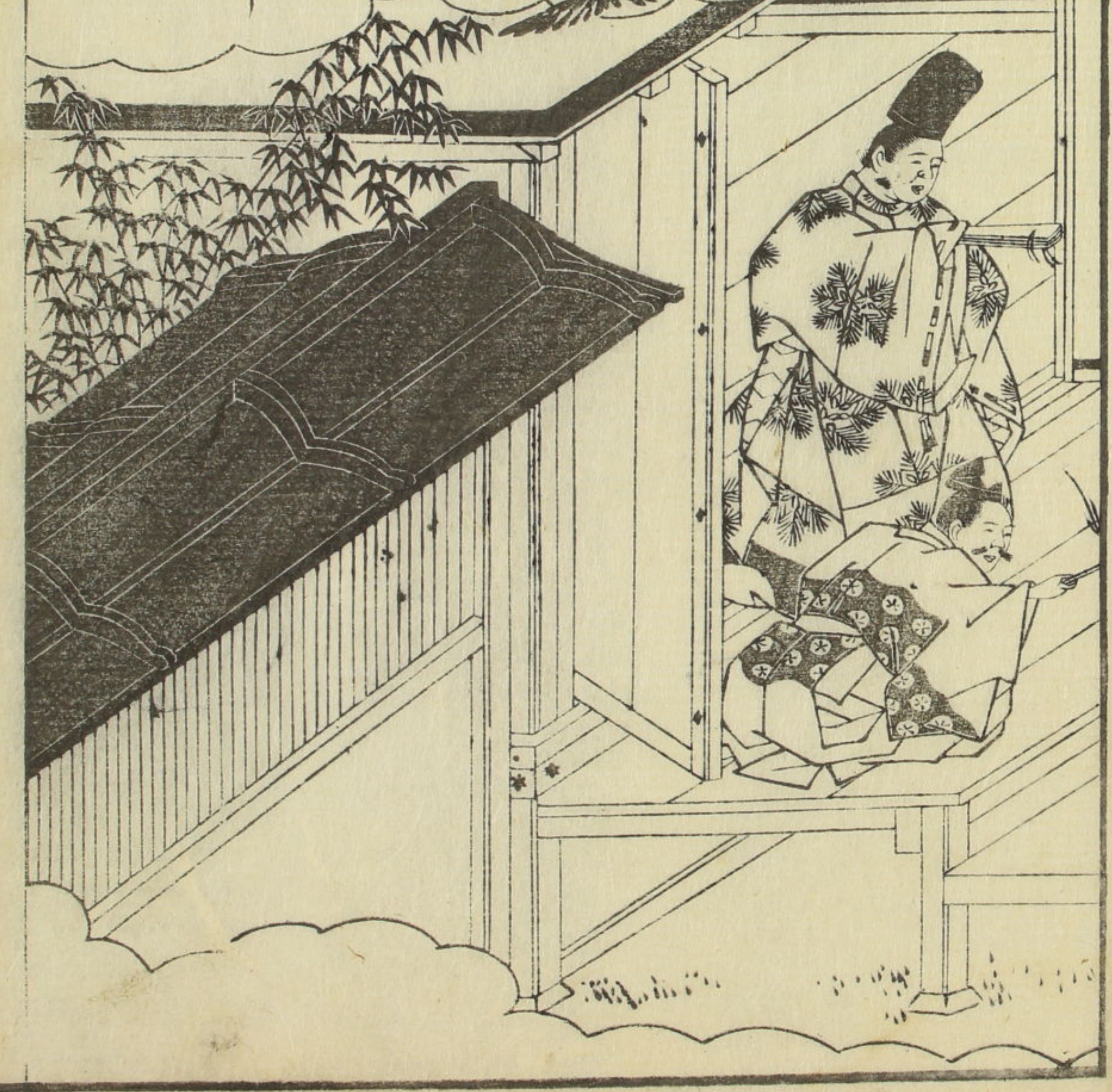
りららたの

古今集秋下志がの
 山城の北白河の
 越は近江の志賀
 出雲の意ハ

詩小具
 禮に年
 かなと和歌
 を詩小等
 志くして
 樂み遊あり
 樂も
 ちつて
 天地
 を遊
 思ひ
 神と
 感せ
 志し
 とも
 ゆる
 とい
 ら
 べ



和歌と
 もん
 賞譽
 の
 賞て
 忠
 一首
 師尹
 感
 不
 皇國



して風をぬくことろのたは小きう流きまへくえ流きおほきぬ
 ちの流きまへくえ流きおほきぬ
 らくえ来柵りもの川の岸堤かき水ののあ中へ杭とらて
 竹束がたけしむつげくおほきぬ

春道列樹の話

春道より姓のし貞観五年五月乙未の因幡柵正六位上御
 門起りしは春道宿祢より姓と賜りしに代実録より
 なくも大和は春道の森春道の社より名は列樹の先祖ハ
 其所より出し人なりといす

紀氏ハ建内の
 宿祢の子孫ト本
 の角代宿祢木の臣
 都奴の臣坂本の臣
 のは中頃木の字
 を改めく紀の字ト
 せりれり友則の
 父ハ一説は古内權少
 輔有友トソ又の
 説ハ紀有常の子
 かりり友則の官
 ハ寛平九年正月
 土佐柵同十年心
 月内記延喜四年
 七月内記任せ
 らし位ハ五位心

紀友則

久方のひらき
 ちのちし
 古今集春下まさりの花けち

古今集春下まさりの花けち
 久方トハサア夫の枕何
 日なう行して花を
 ちるやんし

紀友則の話

寛平年中に禁中へ歌合ありて、友則左方より、秋の夜
 初めの秋夜よみの講師一座の秋と披講する友則の秋の初五ふち
 を、春の...
 ...して右方の...
 ...面目が...
 ...大内記に任...
 ...集の撰者...
 ...卒や...
 ...あす...

昌泰三年正月相模
 縁下任...
 十四年四月...
 大掾...
 下と授けり

藤原興風

詠歌も... 高
 砂のねも...
 もながめ...

古今集雑上題...
 ...のね...
 ...す...

山の惣名とするとはさきめりしものゆゑに積りしなり
いづれにけしは飲のまゆに播磨國のまゆとけしは海
ゆゑのりしものゆゑにさきめりしなり

藤原興風の話

興風きこうの参議さんぎ濱成はまなりの曾孫そご正六位相模さごの標道成ひょうだちのひま正五位上しやうご
部ぶの正せい位いなりけり院いんの藤太とうたと号ごうす興風きこうの曾祖そい又濱成はまなりと号ごうす
人ひとの文書ぶんしよより國史こくしと和歌わかの式しきとを傳つたへり其和歌わか式しきと世よに
濱成はまなり式しきと号ごうす人ひとの世よに後のち布ふす文書ぶんしよも濱成はまなり式しきも傳つたへり
中書ちゆうしよより早くはやくせりしものゆゑにさきめりしなり

百人一首飛登與我舟理卷三終

